



医療法人近森会

びろっば

1

Vol.234

発行●2005年12月25日

www.chikamori.com 高知市大川筋一丁目1-16 〒780-8522 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者●近森正幸/事務局●川添昇

年頭所感

医療法人近森会理事長 近森 正幸



高齢社会における 急性期医療を目指して

近森会の新しい時代

理事長に就任して20年目に当たる一昨年は、病院らしい病院としての骨格が出来上がった年だったといえる。昨年は医療の質を一層向上させ、2006年への助走となった年だと思う。最近、病床稼働率が95%で安定しているが、これは予約の患者さんが増え、近森の医療の質が向上し、地域の皆さんからの信頼が高まってきたからだと思っている。

昨年4月には10名の研修医が近森会に来てくれた。1年経って遅しく成長した研修医を見るにつけ、近森会の新しい時代を実感している。

高齢者急性期医療の確立を

ERでは救急部長として根岸正敏先生に来ていただき、ERの専任者として常駐してくれており、救急医療の質の向上につながっている。それをふまえ、5月には近森病院の外来診療体制を一新、1階はERと飛び込みの一般外来、2階は専門外来とした。こうした外来の機能分화가、待ち時間の短縮や外来診療の質的向上にもつながったと思う。

7月には鈴木基先生と石田正之先生

に長崎から来ていただき、呼吸器内科を新設、肺炎などの診療に専門家の立場で対応してもらえるようになった。抗生剤の適切な選択や投与期間の設定がこれまで以上に厳格に行われるようになった。

8月には内視鏡センターを本館7階に開設、また、心臓カテーテル室が2室体制となり、消化器や循環器の診療が効果的に行なわれるようになった。

さらに10月には人工呼吸器のラウンドが始まり、人工呼吸器の適切な選択や早期の離脱のために呼吸管理チーム(RCT)を発足させた。

こうした努力により①迅速確実な根本治療、②低栄養に対する栄養サポート、③廃用に対するリハビリ、④合併症の予防のための抗生剤と輸液を必要な期間だけ必要な種類を投与する、といった高齢者急性期医療の基盤が、近森病院において確立されつつあると考えている。

近森会の取り組み

近森病院においては今年春にはDPC調査協力病院から、実施病院になる可能性が高く、それに向けてNSTや早期リハビリに取り組み、できるだけ早

く自宅に帰っていただく努力を行ってきた。また今年一年かけて、電子カルテを導入し、より効率的な医療を展開しようとしている。

近森リハビリテーション病院では栗原院長をはじめスタッフの努力により高度の回復期リハビリ病棟を目指している。在宅総合ケアセンター近森も在宅サポートセンターにおける患者さん中心の努力が認められる時代となってきた。

第二分院もより急性期の精神科医療に取り組んでおり、早く治して退院してもらい、出来るだけ自宅で暮らす方向で努力している。こうした総合心療センター近森の志が、精神科医療のモデルになる時代がやっと見えてきたと思う。

こうしてみると近森会全体として、急性期でありリハビリであり、精神科であり、将来あるべき日本の医療の姿を実践していることはたいへん素晴らしいことである。

いま輝いている人を

時代は医療を提供する立場から消費者中心に変わった。既得権益で守られていた医療界は厳しい時代を迎えようとしており、自助自立の時代がすぐここに来ている。去年の忘年会で永年勤続表彰は中止となり、近森会 MVP 表彰でいま輝いている人を大事にするようになった。これは、年功序列の給与体系から、能力給に変わらざるを得ない時代になったことを示している。

私たちは、現実の患者さんに学びながら、どういう医療を提供すればいいかを常に考え、高齢社会の医療のあるべき姿を考え実践することが、われわれの使命であろうと考えている。

● 1月の歳時記 ●

水仙 スイセン

文と画 いごっばち栄養科 川崎 麻由

美少年ナルキソスが水面に映る自分の姿に恋をして毎日見つめ続けた結果、花になってしまったというギリシャ神話があり、それが水仙だと言われていました。自分の美貌に酔いしれる人をナルシストと呼ぶ由来もここからのようです。

水仙は花の美しさと芳香が特徴で、12月頃から咲きはじめ、お正月の生け花としても使われています。



ヒガンバナ科
学名は Narcissus

看護研究発表会報告

教育看護師長 松永智香



発表者の皆さん(敬称略で後列左から) 岩本幸子、立石修久、村田美保、山崎圭、安田親司、小松祥子(同会)、市川一美、上総満高(3群座長)。前列左から森仁美、和田有加、牧野美幸、竹村夢見、岩越直子、前田由紀(1群座長)、山脇寛子(2群座長)

看護の質の向上のための 新たなスタート

11月26日(土)に平成17年度院内看護研究発表会を開催しました。今年から看護研究方法論に焦点をおき、各部署の研究活動を2年に1回と致しました。

研究グループメンバーたちは日常の看護における疑問を明らかにするため、院外講師による助言(1カ月に1回15分)をうけたり、ディスカッションをしたりしながら研究計画書を作成し、調査や介入などを行ない、論文を作成し、当日の発表に取り組みました。そのような努力の甲斐(かい)があって、「看護の質の標準化に関する研究群」、「看護師の意識や感情に関する研究群」、「創造的な看護研究群」に分類され、発表されることとなりました。発表論文のタイトルと研究者は表のとおりです。

当日は院内外より約150名の参加があり、関心あるテーマに対する質疑応答が活発になされました。また、院外参加者よりいただいたアンケートの中の質問に関しては、地域医療連携室を通じてお返しいたしました。この誌面をお借りして、院外より参加し、発表会を盛り上げてくださった皆様にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

そして、発表者のみなさん、研究グループのみなさん、座長さん、教育委

員のみなさんお疲れさまでした。

この看護研究発表会を終えることで、看護の質を向上させていくための新たなスタート地点に立ちました。これからも患者さんやご家族の満



平成17年度 看護研究発表会

足のために、そして地域社会に貢献していくために頑張りたいと思います。

発表論文のタイトルと発表者

1. 脊椎麻酔後のシバリング予防～術前(OP入室時)下肢加温効果の検討～手術室 立石修久
2. AVインパルス使用法の統一～効果的なマニュアル作成を目指して～CCU病棟 森仁美
3. 行動制限に対する家族の理解～実態調査とビデオを活用して～新館6階東病棟 牧野美幸
4. ストーマケア指導の統一に向けての取り組み～アンケートによる実態調査と指導パンフレット作成～新館5階西病棟 和田有加
5. 当院における看護師が受けた身体的暴力へのサポート体制についての研究 第二分院5階病棟 山崎圭
6. NST実態調査～精神科看護領域における看護スタッフの意識調査を通して～第二分院4階病棟 安田親司
7. 集中治療における栄養サポートチーム導入後の看護師の意識調査 ICU病棟 竹村夢見
8. 緊急時訪問看護の必要性を考える～過去4年間の実績データから～訪問看護ステーションちかもり 村田美保
9. 余暇時間を利用した有効なアプローチについて～自主訓練を取り入れて～近森リハビリテーション病院2階西病棟 岩越直子
10. 早期退院・転院調整に対する患者・家族のニーズ～満足して退院・転院していただく為に～新館3階西病棟 岩本幸子
11. 急性期病棟における個別的な排泄ケアを考える 新館4階東病棟 横山和佳
12. 意欲低下を呈した患者との関わりを通して～日中の過ごし方を考える～近森リハビリテーション病院4階西病棟 市川一美

2005年 近森会 MVP 賞 左 ハートセンター MVP 賞 右の受賞者



左から順に、北村昌久、山崎明美、榮田弘司、西川菜穂、(理事長)、佐野登代子、岡村邦弘、西本奈加、山中俊典、西岡由江
右から、町田清史、坂内誠次、武内香織、松野武彦、(敬称略)部長、入江部長、川井部長、(後列右から)楠目部長。受賞者右から、



率直に疑問点をぶつけあえる指導法



近年、救急医療の分野ではoff-the-job trainingとして、ACLS、BLS、JATEC、JPTECなど多くのコースが開催されている。時間に余裕のない救急現場では手取り足取りの指導が困難なため、特にこのようなコースが普及してきたのかと思われる。ダミーを前にして様々な状況を想定し、治療を進めていくものであるが、その指導の中でよく用いられ

- るのが“成人教育”という言葉である。指導者も受講者も成人であり、問題点を頭ごなしに注意してはいけない、どこからよい点を見つけ出してポジティブに、そして建設的にフィードバックするのがよいとされている。受講者は高い受講料を払っているから気持ちよく帰っていただくというもの。私も受講者、また指導者として今年も計15回コースに参加してきたが、この“成人教育”には疑問を抱いている。
- 受講者によって、受け止め方は様々かと思うが、すべてこのような指導方法が最良であるのか？ 受講者の勉強不足、指導者の低年齢化などの問題点もあるが、指導者も受講者もきちんと事前学習を行い、問題点をきちんと指摘できるような体制も必要ではないだろうか。
- ERでの研修医指導もお互いに成人である。研修医の考え方に目からウロコということもある。よい点、まずい点を互いに認め合い、率直に疑問点をぶつけあえる、そんな指導法もあっていいのではないだろうか。(ER部長 根岸正敏)

山本満壽子 介護老人保健施設 いごっばち施設長12月末日「祝卒業」

私の方こそ近森会に感謝状を贈りたい



▲12月9日に行なわれた2005年度の近森会忘年会の席上、山本満壽子さんには近森理事長から感謝の意を込めて感謝状が贈られた



▲「細かいことはごちゃごちゃ言わなくてもみんなとツーカーで通じるのよ」と和やかな打ち合わせ

二番目の息子さんが小学校に上がるのを機に近森会に勤め始めた山本満壽子施設長が、2005年12月末日付で24年間の思い出の詰まった近森会を退職されることになった。

ご本人にとっては「第一ステージをとうとう卒業する」といった印象のようだ。介護保険の大幅な改定を控えた今、若い人たちに道を譲ることで、介護保険の全部に関わるようにすべきだというのが、組織の一員としての理に叶う処し方ということになるようだ。

語り尽くせないほどに色々なことを近森会で経験させてもらった。そういう意味では何の悔いもなく次のステージへ移れるということになるが、ご本人はこれまで物理的にきつかった家事のこだわりたい部分を丁寧にやっていきたいという。得意の沢庵や糠みそ漬けをもっときちんと作り、煮物でも何でも早朝にサッと準備して夕方遅くなるのに備えていた、そんな色々をここでじっくりやれたら、という思いも強い。

先の忘年会で贈られた感謝状には近森会での活動のエキスが詰まっているからここにご紹介し、『ひろっば』でも折に触れ記事企画でありがたいお力添えをいただいたことを併せてお礼申し上げたい。今後とも益々ご健勝に。

感謝状

昭和61年よりスタートした基準看護体制づくりの当初からリハビリテーション看護の確立まで中心的存在として、貢献されました。さらに介護老人保健施設いごっばちの施設長として、その社会的役割とケアの質向上のために努力され、近森会の管理者として職責を十分に全うされました。その功績は誠に顕著であります。ここに感謝の意を込めて表彰させていただきます。

院外エッセイ

平成21年

裁判員制度が始まります！【その1】



中村 勲

なかむら いさお
高知地方検察庁統括捜査官
■5年前から循環器科でお世話になっており、川井 Dr 関 Dr から「痩せませんね」と注意され続けています



この制度は、選挙人名簿をもとに作られた候補者名簿から、くじで選ばれた候補者が裁判所へ集まり、その中の6人が裁判員になって、裁判に参加するものです。だから、お医者さん、看護師さんも、技術職の方も他の職員の方々も、そして近森病院に入通院されている患者さんも（早く元気になってください）、裁判官の席に座っていただく可能性があるのです。

突然、裁判所からの通知がきてびっくりしないように、少しでも多くの方々を知っていただくためこの誌面をお借りしました。

私の視点、私の感覚、私の言葉で参加します。

求めているものは、お一人お一人それぞれに歩まれてきた人生に裏打ちされた様々な「視点、感覚、言葉」です。

裁判員は何をするの？

1. 裁判所の法廷で、裁判官とともに、証人の話を聞いたり証拠を調べたりします。
2. 「評議」といって、裁判員6人と裁判官3人が一つの部屋で相談し、有

罪か無罪か、有罪ならたとえば「懲役〇年」が相当かを決めます。
3. 法廷で、被告人に対する判決の言渡しに立ち会います。

裁判員候補者になる確率は？

今の時点で大まかなところ、高知県では選挙の有権者1,000人あたり2~3人です。近森病院の職員数は約1,000人と聞いておりますから、近森病院では年間2~3人の方に裁判所からの通知が来ることになります。

裁判が変わり、世の中が変わるという可能性

世の中が平穏で、裁判員制度の対象となる事件が起きなければ、皆さんにご負担をかける必要はないのです。しかし、現実には悲しい事件が続いております。刑事裁判に皆様が裁判員としてかかわってくださることで間違いなく裁判が変わり、少しずつ世の中が変わり、事件が減って、みんなが求める平和な社会になる日が必ずくると願っております。

次の機会に、皆様が疑問に思っておられることや、不安に感じていられるであろうことについて説明させていただきます。



第31回 地域医療講演会

2005年11月30日、高新文化ホールにおいて、武庫川女子大学助教授の小西すず先生をお迎えして開かれた。

高知大学医学部附属病院の公文義雄先生からは小西先生のご紹介をいただいた

ダイエットに関するウソ、ホント!？のクイズでは、例えば豆腐一丁と豚肉50グラムのカロリーを比べるなど、一般的な判断がなかなか通じないダイエットの常識・非常識を学べた



講演中の小西すず先生
「小西先生のパフォーマンスもとっても勉強になりました」

小西先生は、大学内に実践的ダイエット、クリニックを開設され、肥満に悩む一般主婦（50代・60代中心）を対象に減量指導に当たられています。

講座は月1回の5回シリーズプラス半年後の再開講座の計6回で構成され、平成2年のスタートからこれまでに約700名のほぼ全員が減量に成功（平均5Kg減、腹囲り8cm減）されています。

このような実践内容を踏まえ、おいしく楽しくダイエット～肥満指導にとって大事なこと～と題して「目からウロコを落とす」をキーワードに、クイズ形式で始まり、誰にでも分りやすく実行しやすい内容で、1時間半があつという間に過ぎてしまいました。

実際に、栄養指導に携わっている私には、反省すべき点がいくつもあり、目からウロコがぼろぼろと落ちました。今回お話いただいた内容をすこしでも栄養指導や栄養管理に取り入れられるようにしていきたいと思います。

今回、院内外より約150名のご参加をいただきました。参加された皆様も目からウロコが落ちたことだと思います。（本院栄養科主任・管理栄養士 上村二美）



おいしく楽しくダイエット

肥満指導にとって大事なこと

第6回近森会 STOP! エイズキャンペーン 「エイズ」あなたは「関係ない」と思っていませんか?



毎年12月1日は「世界エイズデー」です。今回は、職員だけでなく来院されている一般の方々にもエイズについて身近に考えてもらいたく、11月28日（月）近森病院新館2階フロアでポスター・パネル展を開催し

ました。エイズについてのミニクイズも準備しており、答えてくれた方にはレッドリボンバッジやキャンデーなどをちょこっとプレゼント。真剣に展示物を見回しながら答える姿や、予想外に間違えてしまったとの声を聞くことができました。また、家族で話してみたいとパンフレットを持ち帰る方もいました。皆さんそれぞれに感じるものがあつたのではないのでしょうか。

いわゆる先進国の中でこの日本だけがHIV感染者数に関して相変わらずの増加傾向にあります。HIV感染から自分を守るためにも、自分の大切な人を守るためにもまず「知ること」が一番の予防法。一人でも多くの人たちのAIDSへの関心が高まってくればと願っています。（健康管理センター 梶原麻世）



100万本ひまわり畑

診療情報管理室 大崎衣^{えり}玲



かなり季節はずれになりますが、この写真は広島県三次市君田町の100万本ひまわり畑です。私は大学生活を広島で過ごしました。その思い出の中の1枚です。100万本という数のひまわり



が目の前に現れた時は、感動しました。

ひまわりで作られた迷路もあり、面白かったです。これらの写真を見ると大学時代の楽しかった時間が思い出しく感じ、笑ってしまいます。今でも、大学の友人と大学や恩師に会いに広島に遊びに行っています。

近森正幸理事長・厚生労働大臣表彰



「高知県国民健康保険診療報酬審査委員として多年にわたり国民健康保険事業の円滑な運営に尽くした」という実績が認められ、2005年10月に、近森正幸理事長が厚生労働大臣から表彰されました。

多忙を極める理事長が院外の仕事として、いわば国民の医療費を決める窓口である診療報酬審査委員を務めることは、「可能な限り社会還元に力を尽くす」という理事長のスタンスに叶うことであり、それが認められ、今回の表彰につながったものと思われます。おめでとうございます。(職員一同)

おめでた過ぎです!

ブルゴーニュワインの騎士お披露目の会

ブルゴーニュワインの騎士に叙任された近森正幸理事長のお披露目の会が2005年12月2日に高知パレスホテルで開かれた。

仏文学者の篠沢秀夫学習院大学名誉教授など、ワイン通のお客さまに多数ご出席をいただき、和やかなお慶びの会となった。



篠沢教授のワインクイズに正解し嬉しそうな近森理事長。左は司会の入江心臓血管外科部長、右奥は秘書の光明院さん



ドクター・アイ

週末を通販のワインで

放射線科 目崎一成

4月に赴任してから8カ月が過ぎた。忙しい日常で普段の帰りは遅くなったが、週休二日のため当番でない週末はゆったり過ごせるようになり、時々ワインを飲むようになった。

もっぱらインターネットで購入しているのだが、これがなかなか面白い。毎日のように奇跡のワイン?が紹介されている。マルゴーと同格の評価を受けた36,801,980円のワインとか枚挙にいとまもないのだが、気になる1本を買ってみる。このテイस्टングの文句もなんだかすごい。

ブラックカレント、コケモモ、黒スグリに加えて、なめした皮の香り、濃厚なチョコレートの香り、まるでロマネコンティ。100倍のコストパフォーマンスの2,980円とある。実感できそうなのはチョコレートの香りのみであとは想像不能であるがとにかく家内と飲んでみる。確かに美味しい。

ロマネコンティと同じものなら30万以上はするのだろうか、せめて1万円位のワインとってくれるかどうか、能書きだけ言って値段は内緒で感想を聞く。「美味しいね。3,000円はするだろうね」とか言っている。今度はかなり頑張ってるでシャトーディケムとかいう7,980円のワインを安物のようによくいながら普段の日にあけてみる。すると「これは美味しいね。8,000円はするんじゃない?本当に安いのか?」などと言いつけてる。

どんなテイस्टングの文句よりも値段設定は結局のところ正直である。もっとも本当にロマネコンティそっくりの味に出会ったとしても本物を飲んだことの無い私に評価のしようも無いことは言うまでもない。美味しく一緒に飲める人がいればそれこそがきっと良い週末なのである。(めさき かずなり)



キラリと光る看護 その23



顔つきあわせた相互理解で安全と信頼の医療を

看護師が勤務に入る時は「どうぞ事故が起きないように・起こさないように」という祈りにも似た緊張感をもってスタート

する。それでも毎月本院とリハ病院では平均して40件から50件、第二分院では10件前後のヒヤリ・ハット報告書が出てくる。業務の場でヒヤッ!とした情報を共有しあうための報告だから、包み隠さず出てくるのはありがたいが、受け取った側はそれを分析して根本的な原因追求と予防策を立てなくてはならないから大変である。

その仕事に取り組んでくれているのが医療安全担当看護師長とセーフティナース、組織としての医療安全委員会である。彼らは「ミスの当事者はきちんと自己反省しなければならないが、周囲は個人を責めないで、環境やシステムの改善に真摯な目を向ける」という風土づくりと事例分析・対処コメントの提示や毎月の医療安全勉強会・医療安全セミナーの開催など教育的サポートを行ってきてくれた。

その努力あって昨年も大きなアクシデントは無かったが、さらにみんなが燃え尽きないで一步前進するために必要なことについて乾静看護師長と話合った。「医師に時間的余裕ができて患者さんやスタッフと相互理解が図れ、医師の本来業務をタイムリーに実践できれば……それが第一。看護師は知識・技術の現任学習を自己啓発と目的により教育対象を絞った効果的な勉強会開催で。そして全部署に月1回短時間でよいのでクオリティマネージャーと顔を突き合わせて意見交換する場があれば」ということなどだった。実践できる良い年となることを願って。

出張報告 ● リハビリテーション・ケア合同研究大会に参加して

2005年10月28、29日に大阪国際会議場で、リハビリテーション・ケア合同研究大会が開かれた。



先見的な視野の 一層の必要性

大会のテーマは、「医療・福祉の総合的な支援体制を目指して」で、講演やパネル討論、ポスター・スライド発表が行われました。

講演や各演題発表が会場を分けて同時に行われていたため、聴講できたものは一部でしたが、特に印象に残った岩月幸一先生と宮井一郎先生の講演を紹介したいと思います。

岩月幸一先生は「ここまできた脊髄移植」というタイトルで、現在研究されている嗅粘膜移植による脊髄損傷の再生医療について報告されました。手術時の貴重な映像や完全損傷の対麻痺者が歩行器歩行を行えるまで回復している映像なども紹介されていました。まだ実施例も少なく、適応・時期など、検討すべきことも多いとのことでしたが、今後日本でも臨床適応に向けて研究を進めていくと話されていました。医療者として患者の皆さまと関わる上では医学の現状や今後の可能性・課題に常に敏感であり、先見的な視野をもってリハをすすめることの必要性を強く感じました。

宮井一郎先生は「リハビリテーションにEBMをもたらすには？」という講演で、EBMの必要性や研究方法のあり方に関する内容でした。現在、リハにおいてEBMが明らかなものとしては、早期介入、リハの頻度、チームアプローチの3つであることを指摘し、回復期病棟と一般病棟の比較では、自宅復帰率に有意差があることも強調されました。ふだん、私たちが仕事をする中で、回復期病棟でのチームアプローチの必要性や在宅復帰を迫及することの重要性を再認識することができました。

また、大会後に懇親会に参加し「少ない」と文句をいいながらも、テーブルに大量の料理をならべ、お腹いっぱいご馳走をいただきました。食べているだけではなく、しっかりと他の施設の方々と情報交換もしてきました。特に、初台リハ病院のスタッフや石川誠先生と語り合い、そのエネルギーに圧倒されながらも、「僕達もがんばろう」と気持ちを新たに……つもりです。(近森リハ病院理学療法室 前田紀子 佐竹 亮)

続 管理部長のキャン こだわり料理 15



●新年号に因み「お正月料理を」との編集委員会でのお話だが、おせち料理ができるほどの専業料理人でもないので、正月料理に飽きた方々向けの

シンプル 湯豆腐



を紹介したい。

画：第二分院
栄養科主任
管理栄養士 吉田妃佐

豆腐は私の好物で鍋物には欠かせないが、冷奴は随分昔亡くなった祖母を思い出す。小学生の頃、夏休みになると家の近くを流れる鏡川で思いっきり遊んで、腹ぺこのお昼のおかずはいつも冷奴であった。毎日それが繰り返されたが飽きなかった。冷蔵庫が無かった当時どうやって冷やしてくれていたのだろうか。

○材料①豆腐・油揚げ(湯通ししておく)・各適宜②刻みネギ・おろししょうが③昆布・かつお節④酒・しょう油・ミリン

○作り方①土鍋に天然水(市販のペットボトル)を張り、昆布を鍋底が見えないくらい多めに入れ、半日以上漬けておく②ダシを作る。水300ccを沸騰させ、かつお節を鍋いっぱいになるくらい大量に投入し、中弱火2分ほどで火を止め、かつお節が落ち着いたらキッチンペーパーで漉す(※使ったかつお節をもう一度火にかけ10分位煮出し2番ダシを作ってタッパーで冷凍保存し何かの料理に使う。これは余談)。

③つけ汁を作る。ダシに材料の④を入れ濃い目に味付けする。味見をして、かつおの酸味と旨味がこめかみにチーンとくるくらいダシが効いていると嬉しい。

最近読んだ開高健の短編小説に「湯豆腐は一にも二にもつけ汁が問題だ」と書かれていた。確かにそうだと思う。

○食べ方 土鍋にはった水が昆布から出たダシで黄色くなった状態を沸かし、豆腐と油揚げを投入しゆらゆら上がってきたら食べ頃。ダイコンを入れておくと豆腐はよりふっくらする。ネギ、しょうがを入れたつけ汁でフーフー言いながら食す。前日から水と五分五分に冷やしておいた栗焼酎のあてにぴったりである。熱い、冷たいのコンビネーションが抜群である。それにしてもちゃんちゃんこを着てコタツでひとりこれをやるとすれば少し淋しくもあり、大いに楽しくもあり……。 (川添 昇)

ハッスル研修医・第8回

私の生きる道♪ どんな道も恐れない frontier spirit を持つ

新年あけましておめでとうございます。「ハッスル研修医」も8回目を迎えました。何を書こうかいろいろ迷いましたが私の好きな詩を書こうと思います。

『道』

この道を行けばどうなるものか
危ぶむなかれ。
危ぶめば道はなし
踏み出せば
その一歩が道となり
その一歩が道となる。
迷わず行けよ
行けばわかるさ

この歌は皆さんご存知の? 燃える闘魂アントニオ猪木が引退セレモニーの際にファンに贈った言葉

研修医 田中 孝明



でもあり、東京上野毛にある新日道場の道場訓でもある。実はこの詩はもともと一休禅師、つまり一休さんの詩なんです。

話は変わりますが、タバスコを日本に始めて輸入したのは、かのアントニオ猪木です。(有名な話ですが…) そう、どんな道も恐れない frontier spirit を持つこと。これが私の生きる道♪

裏方を極める覚悟で、 不言実行。

2005年6月で満40歳になったのをきっかけに、一日40本吸っていたタバコをきっぱりヤメた。「川井循環器科部長にいつもヤメろと言われていて、40歳をきっかけにヤメると約束したからです」と、涼しい顔。だからといって、「そんなに決意が強いということではありません、誕生日の朝から禁煙を始め、昼過ぎには吸いたくなって川井部長に禁煙パッチを出してもらって3日間貼ったからヤメられただけです。普通です」。こんな感じで、二言めには謙遜の言葉……。

そして、「今のところヤメてます。そう言っとかないと、また吸いだしたらシャレにならないでしょ!」。つねにこういう調子、抜かりなく、いつも先へ先へと神経を配り、身体からオーラのように緊張感が漂っている。営業マンというよりも、一途に何かに打ち込むのが似合いそうな頑固一徹研究者風に見える、かと思えば、ご本人曰く「普通です、ボク。取り立ててどうということはないんです」。

そういつつも何か自分の特色を探さねばとサービス精神いっぱい、「血液型はB、典型的やと思っています。野球が好きで、小学生の息子のチームのコーチをずっとやってきました!」とも。いつも相手の意を最大限くみ取る努力を惜しまない人なのだろう。

高校を卒業して大学に行くよりも東京に行きたかったという理由で薬品卸し業の会社へ入り3年半勤めて帰高。その後、現在のシーメックの前身「土佐メディカル」に就職、18年が過ぎた。自由に伸び伸びやらせてもらって今日がある、と会社にも、ずっと担当している近森会にもホントに感謝しているのだが、むろんこんなことは改めて言葉にするのは美学に反するし、だいいち「自分は昔風の人間ですから」と、つまり、なにごとにも「云わぬが花」の人らしい。

仕事を一生懸命やるとか、どうやるかがいちばん病院のためになるか、とか必死で考えるなどということは、余りにも当たり前のことで、取り立てて自分の熱心さを宣伝するようなことではない。なにごとにも「普通です」が人生のスタンス。肩が凝りそうな気負いも、やたらに張



我ながらかなり几帳面!これまでのカテーテル検査器具の注文控はこのノートで瞬時に解る

り切っているというむき出しの馬力も見せない代わりに、どういう状況でも常に10割の力を出し切れるという万全の体制を整えているという自負がある。

また、これも「普通のこと」で、自慢することではないそうだが、出勤はいつも誰よりも早い。

賭け事のような遊びはしないしお酒は

川井和哉循環器科部長と心臓カテーテル検査室で。まるで噛みつきそうな勢いで真剣勝負の打ち合わせ



少々呑むが休みには家族と過ごしたい方で、「子ぼんのうだし、まあまあ家庭的といえるのではと思っています」とのこと。

仕事には「絶対ミスを出さない」よう全力投球なのに、息切れしない力の配分ができるのは、田中さんが病院の仕事に付き物の緊迫感がじつは大好きだから!なのだろうか。

ボウリング

リレーエッセイ

幸運の女神が微笑む時



本院相談室医療ソーシャルワーカー 中山 典子

最近、私は週1回のペースでボウリングに行っている。高校時代、友達との間でボウリングがブームとなり、一時期は毎週末通っていたものだ。高校を卒業し、大学時代は何回か行ったこともあったが、仕事を始めてからはほとんど行く機会は無かった。

それが、つい9月の末、職場の仲間と食事の後に「ボウリングをしよう」ということになり、ずいぶんと久しぶりに行くことになった。なつかしのボウリング場でワクワクしながら靴を借りてボール選び。どれくらいの高さのボールが良かったのかさえ覚えていなかったが、レーンの前に立ってボールを投げる時、私はあることを思い出した。大学時代の親友がとてもボウリングが上手であり、真っ直ぐに投げるコツを教えてくれたのだ。それを思い出して投球を始めた。する

と、どうだろう!! 思いのほか調子良くピンが倒れていく。高校・大学時代からは考えられないハイスコア!一緒にいった職場の仲間も意外な展開に目を丸くしていた。これに気を良くした私は、気づくと週一回ボウリングに通っているというわけである。現在のベストスコアは201。(ちなみに今までの成績は100前後...)。ボウリングが得意な人にとっては驚くほどの成績ではないだろうが、私にとってはちょっとした自慢である。

そんな私の調子の良さも、幸運の女神の力も衰えてきたのか思うようないい成績が出なくなってきた。それでもボウリングはおもしろい。何より、仲間とわいわいと過ごせるその時間は大いに息抜きとなり楽しいひとときである。

シリーズ●クリニック探訪13

松本 医院

吉良川町並み駐車場の真ん前 (真北)

(室戸市吉良川町甲 2263)

tel.0887-25-3455 fax.25-3486

▶院長・松本諄(まこと)。S15年12月7日、水戸市生まれ、広島県出身。趣味は音楽と園芸。



- 診療科目 ● 内科、外科、リハビリテーション科
 診療時間 ● 午前 8:30~12:30 午後 2:00~5:30
 休診日 ● 日曜、祝日

病診連携、在宅診療をテーマに無床診療所を開いています。素朴な診療を、病診連携によってハイテク医療に結びつけることを目指しています。



お知らせ

全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会
 17年度総会・第7回研究大会
 テーマ
「回復期リハ病棟からの発信」
 ~果たすべき役割の再確認~
 平成18年2月3日(金)13時~受付
 4日(土)9時~17時30分
 5日(日)9時~12時10分
 会場 高知市文化プラザかるぼ〜と
 大会長 近森リハ病院院長 栗原正紀

11月の診療数	近森会 外来患者数	19,019人	企画情報室
	近森会 新入院患者数	812人	
	近森会 退院患者数	778人	
	地域医療支援病院紹介率	89.57%	
	近森病院平均在院日数	16.03日	
	近森会 平均在院日数	24.08日	
	近森病院救急車搬入件数	428件	
	うち入院件数	205件	
	手術件数(手術室での)	243件	
	うち全身麻酔件数	129件	

図書室便り

(11月受入分)

- 画像鑑別診断クイックリファレンス 5 骨・関節・軟部組織・四肢脈管・系統疾患・PET / 榎林 勇 (他著)
- 抗菌薬使用のガイドライン / 日本感染症学会 (他編集)
- めんどろな栄養計算がいつさいらない 決定版カード式 透析を避けるための毎日のおいしい腎不全献立 / 中尾俊之 《別冊・増刊号》
- 臨床スポーツ医学 臨時増刊号 高齢社会における運動支援実践ガイド / 臨床スポーツ医学編集委員会 (編集)
- NEWMOOK 整形外科 No19 低侵襲手術 / 越智隆弘 (他編集)
- 臨床放射線 別冊 FDG-PET 検査の正常像とピットフォール / 久保敦司 (編集)
- インфекションコントロール 2005 年秋季増刊 エビデンスに基づいた ICT のための感染対策トレーニングブック / 大久保憲 (監修) 《ビデオ・DVD》
- VIDEO JOURNAL of Japan Neurosurgery vol.13 No.4 / 日本脳神経外科学会 (監修)

編集室通信

▼団塊の世代がどっと定年を迎える年が間近に迫ってきた。まだまだ現役で働きたいと思う人、待ち兼ねたように職場を去る人、悲喜こもごものドラマが展開されるのだろう。何事も先に先にと準備できるのであればそれに越したことはないが、毎日雑事に追われ、あまりビジョンも持てないままに日々が流れている。私もあと15年もあると思うのか、すでに15年しかないと考えるのか、そろそろ社会保障も含めて将来設計を真剣に考える時期に入ったなあ…と悩めるこの頃…… (松)